和水町文化財調査報告　第３集

和仁石山城跡（わにいしさん）

（旧）菊水町所在の中世城跡

2007年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

和水町文化財調査報告　第３集

和仁石山城跡
（わ　に　いし　さん）

（旧）菊水町所在の中世城跡

2007年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

序　文

菊水町では、平成13年度から町史編纂事業を進めてきました。その中で、副委員長の大田幸博先生が担当されている中世城跡調査については、その都度、詳細な調査結果を報告書として出版してまいりました。今年度を加えますと合計５冊にも及び、貴重な調査資料集となりました。頁に制限のある町史『通史編』では記載できない詳細部分を、このような形で残していけますことを嬉しく思います。

平成18年に菊水町と三加和町が合併して「和水（なごみ）町」が誕生しました。今回、調査を行いました和仁石山城跡は、間接的ではありますが、（旧）三加和町の国指定史跡「田中城跡」とのつながりを有しております。したがって、この時期にふさわしい城跡の調査になりました。

最後になりましたが、この調査報告書を出版するにあたり、大田先生をはじめとする関係各位に心からお礼を申し述べます。

平成19年３月31日

和水町教育長　　相　澤　紘　一

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査の組織 …… 1
　第２節　調査の進展 …… 1
　第３節　城跡の概要 …… 1
　　内田神楽について　居石裕臣 …… 5

第Ⅱ章　調査の成果 …… 11
　　Ⅰ　郭 …… 11
　　Ⅱ　郭 …… 12

第Ⅲ章　まとめ …… 22

挿 図 目 次

第１図　熊本県玉名郡和水町位置図　1
第２図　菊水町所在の中世城跡　2
第３図　和仁石山城跡周辺地形図および大字内田の字図　4
第４図　内田地区三社・三城位置図　7
第５図　和仁石山城跡周辺地形図　8
第６図　和仁石山城跡周辺地籍図　9
第７図　和仁石山城跡全体測量図　13
第８図　和仁石山城跡測量図①　16
第９図　和仁石山城跡測量図②　17
第10図　和仁石山城跡測量図③　18
第11図　和仁石山城跡測量図④　19
第12図　和仁石山城跡測量図⑤　20
第13図　和仁石山城跡測量図⑥　21
第14図　写真撮影位置図（1）　24
第15図　写真撮影位置図（2）　26
第16図　写真撮影位置図（3）　32
第17図　写真撮影位置図（4）　36
第18図　写真撮影位置図（5）　40
第19図　写真撮影位置図（6）　42

写 真 図 版

図版１　和仁石山城跡　遠景（菊池川対岸の和水町立病院屋上から望む。ここからは菊池川の流路が望めない）　25
図版２　Ⅰ郭東端からの眺望（菊池川と和水町立病院方向を望む）　25
図版３　Ⅰ郭山頂域（中央→北西）　27
図版４　Ⅰ郭山頂域（中央→南東）　27
図版５　Ⅰ郭東端（菊水町の中心部が望める）　28
図版６　Ⅰ郭東側下（崖面は石切り場跡で、絶壁状態にある）　28
図版７　Ⅰ郭西側下　帯状削平地（北西→南西）　29
図版８　Ⅰ郭西側下　帯状削平地（人物奥の竹林は伐採前の状態）　29
図版９　Ⅰ郭西側下　窪地（細かなブロックに分かれ、高低差がある）　30
図版10　Ⅰ郭西側下　窪地（北→南）　30
図版11　Ⅰ郭北西側下　帯状削平地（南西→北東）　31

図版12　Ⅰ郭北西直下　一段②（上段の帯状地形から見下ろす）　31
図版13　Ⅰ郭北西直下　一段①（北東→南西）　33
図版14　Ⅰ郭北西直下　一段①南西壁面（壁面には石積みが見られるが、城時代のものかは不明）　33
図版15　Ⅰ郭北西直下　二段⑤（上段の一段②から見下ろす）　34
図版16　Ⅰ郭北西直下　三段⑥（北東→南西）　34
図版17　Ⅰ郭北西下域（三段⑥から見下ろす）　35
図版18　Ⅰ郭北西下域（Ⅱ郭－１から見下ろす）　35
図版19　Ⅱ郭－１（南→北）　37
図版20　Ⅱ郭－２（南→北）　37
図版21　Ⅱ郭－１北側法面の削り落とし　38
図版22　Ⅱ郭－２北側法面の削り落とし　38
図版23　Ⅱ郭－３（南→北）　39
図版24　Ⅱ郭－4d南端部（上段のⅡ郭－4cから見下ろす）　39
図版25　Ⅱ郭－4c（南→北）　41
図版26　Ⅱ郭－4d北端部（上段のⅡ郭－4cから見下ろす）　41
図版27　和仁石神社　拝殿と神殿（Ⅱ郭－９）　43
図版28　和仁石神社　参道（東下の県道６号から上る石段）　43
図版29　Ⅱ郭－10b（南東→北西）　44
図版30　Ⅱ郭－10e（南東→北西）　44
図版31　Ⅱ郭－11（神社参道の石段から見下ろす）　45
図版32　Ⅱ郭－８　窪地（和仁石神社から見下ろす）　45

例　言

１．本書は、玉名郡和水町教育委員会が、菊水町史編纂事業の一環として実施した（旧）菊水町所在の中世城跡･和仁石山城跡の測量調査をまとめたものである。調査成果については、菊水町史第３巻『通史編』第五章「中世菊水の城跡」で発表したが、紙面に限りがあったので詳細な部分を本報告書で取りまとめた。

２．城跡地は「和仁石さん」と呼ばれる箇所で、城名が付けられる時に「さん」が「山」にあてられた。

３．測量調査は、町史編纂副委員長の大田幸博氏（県立装飾古墳館長）を中心に益永浩仁と石工みゆきさん･溝口真由美さん（町史編纂調査補助員）で行った。

４．菊水町史編纂事業の一環であるので、本文中の町名の表記は、合併前の菊水町・三加和町とした。

５．本書の執筆は、大田氏・益永と居石裕臣で行い、挿図は石工さんと溝口さんが作成した。

６．本書の編集は、大田氏と益永で行い、溝口さんの助力を得た。

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の組織

調 査 主 体　　和水町教育委員会

調査責任者　　相澤紘一（教育長）

調　査　者　　大田幸博（町史編纂副委員長・県立装飾古墳館長）　益永浩仁（総合教育課文化係参事）

調 査 補 助　　石工みゆき・溝口真由美（町史編纂調査補助員）

調査事務局　　宮地幸子（総合教育課長）　　黒田裕司（総合教育課文化係長）

　　居石裕臣（総合教育課文化係参事）

現場作業員　　北川敏一

第２節　調査の進展

菊水町史編纂事業の一環として、平成13年度から町内所在の中世城跡の測量調査を重ねてきたが、今年は、菊池川右岸の和仁石山城跡を調査対象とした。これで、山鹿市との行政境に位置する焼米城跡を皮切りに、11城跡の実態を解明したことになる。これらの調査成果は、本書と既刊４冊の調査報告書を元に、総括的なまとめを行い、町史「通史編」に記載した。

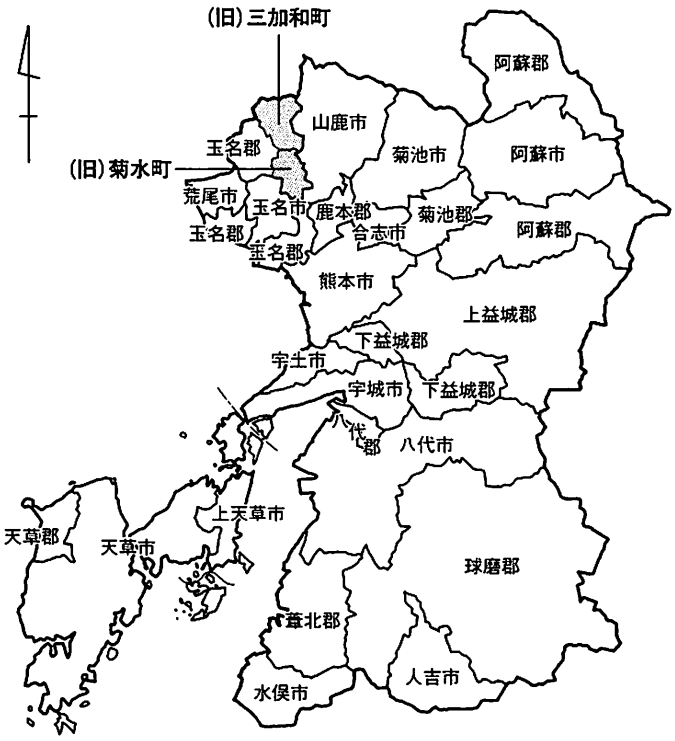
第３節　城跡の概要

和仁石山城跡は、文献未記載の城地である。城名は、県教委が昭和52年3月に発刊した『熊本県の中世城跡』による。町教委の益永浩仁参事は「当時、新発見の城跡で、当該の小山に城山の呼称があり、城内の和仁石神社から城名が付けられた」という。

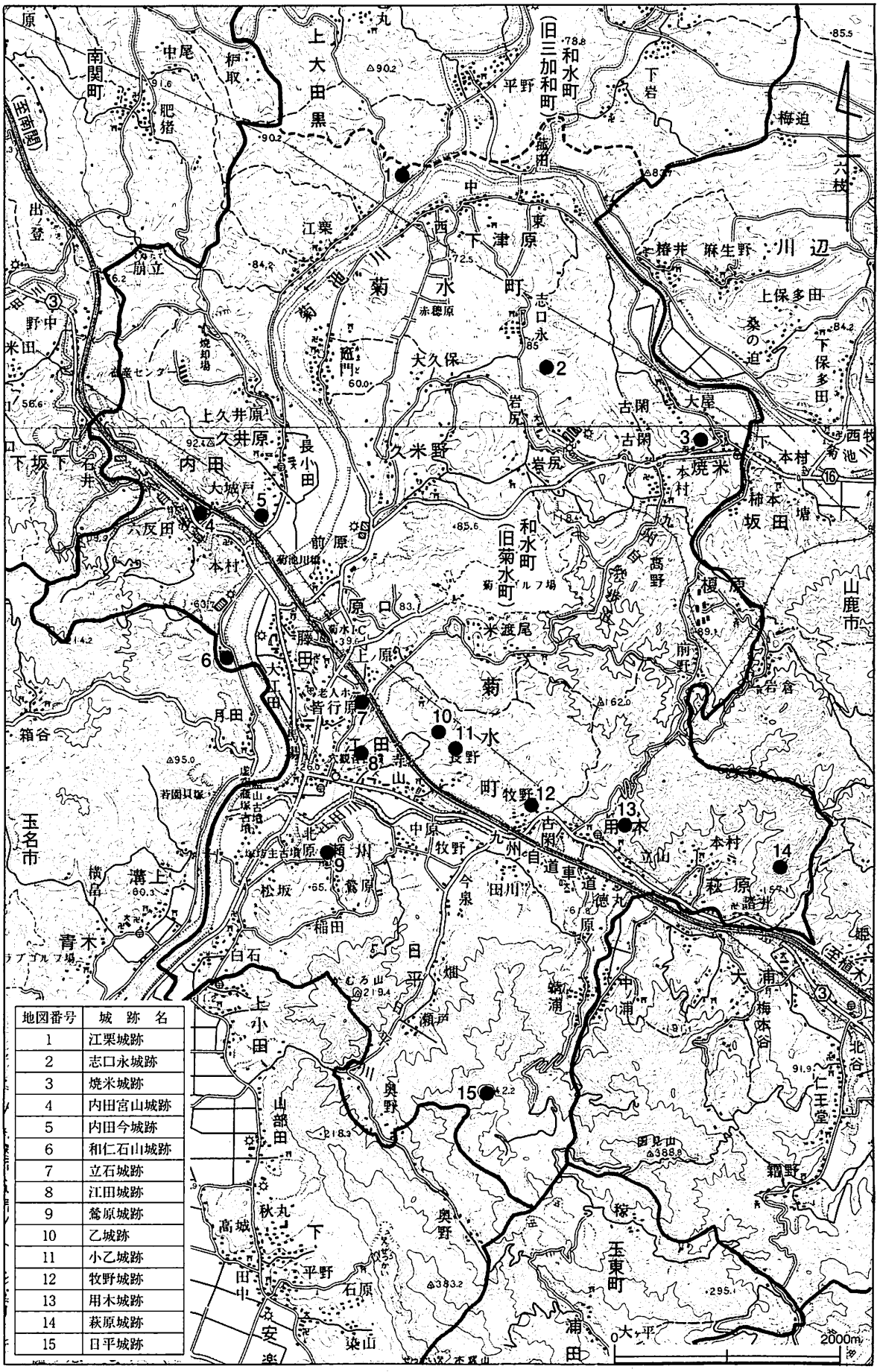
城跡は、玉名市との行政境にあって、菊池川の右岸に位置する小山で、最高所の標高は66m強。東下の県道６号（主要地方道玉名・立花線）との比高差は49.43m。対岸の和水町立病院の屋上からは、城跡地にふさわしい形の整った山容が眺められる（写真図版１）。

城域の中心部は、お椀を伏せたような小山をなしている。この区域は、北側から川岸沿いに延びてきた低丘陵地の南端にあたっている。一連の丘陵地は、このように城地を境に一端、途切れて、再び、つながっている。

近くに麓集落はなく、地元の内田地区では最も南端部にあたる。地元では「内田宮山城跡と内田今城跡を加えて、内田には三か所に城跡がある」と認識されている。三城跡の間隔は、内田宮山城跡と内田今城跡が東西方向に約



第１図　熊本県玉名郡和水町位置図



地図番号	城　跡　名
1	江栗城跡
2	志口永城跡
3	焼米城跡
4	内田宮山城跡
5	内田今城跡
6	和仁石山城跡
7	立石城跡
8	江田城跡
9	鷲原城跡
10	乙城跡
11	小乙城跡
12	牧野城跡
13	用木城跡
14	萩原城跡
15	日平城跡

第２図　菊水町所在の中世城跡

0.6km弱、内田宮山城跡と和仁石山城跡が南北方向に1.3kmとなる。内田出身の居石裕臣参事は「さ程、広くない一地区に三城跡を数えるのは、いかにも多い気がする」という。確かにそのような感じがする。

内田地区については、町域が一級河川の菊池川を跨いだ西側部分にあたり、南端に位置する和仁石山城跡が玉名市との境にあたっている。地図上では亀の頭の形をした城山が、玉名市側へ突き出しているように見える。

一方で、この町域の北西部を広域的に見ると、北端の江栗地区では、三加和町との行政境に江栗城跡があり、和仁石山城跡に似た状況をなす。現在の行政区割りであるが、これらは町境の城地として興味がある。両城跡間は約4.6kmで、これは、菊池川を跨いだ北西町域部分の南北幅にもあたる。

〔交通アクセス〕

菊池川に架かる内藤橋を渡って、川沿いに県道６号（主要地方道玉名・立花線）を玉名方面に進むと550m先に採石場の入り口（注）がある。ここから右折して坂道を70m上がった所に分岐点があり、車の通れる小道が南へ延びている。100m進むと城山への登り道があり、70m上がると駐車可能なスペースがある。車の乗り入れは、ここで終わる。左手に和仁石神社があり、一方で、山道を90m登り詰めると絶壁の丘陵端に出る。真下は菊地川の沿岸を走る県道となる。ここから右手に折れて山腹を少し上がれば城山の山頂に至る。

（注）これから先の小道は、新設されたものである。

〔城跡の現状〕

中心部の城山は、孟宗竹が繁茂するところであるが、山を管理される方がおられて手入れが行き届いている。それでも調査前の城山裾部と、間に迫地を挟んだ丘陵本体側のⅡ郭（一部は杉の植林地）は一面に竹や下草が茂っていた。菊池川に面する城山の東斜面は石切り場跡で、今日、絶壁状態にある。山頂の東端に立てば、東方向の眺めは絶景で（写真図版２）、この地が城跡であることを納得させる。まさに、物見の砦という感じがする。ただし、近くに集落がなく低山地域にある事から、内田地区の集落から見れば、奥まった場所となる。有事の際の連絡手段は、狼煙以外に方法がないように思える。

〔伝承〕

城名を記した文献はないが、城内の和仁石山神社には『肥後国誌』『和仁軍談』『南関志』などに三加和町の国指定史跡・田中城跡との関連を伺わせる記述がある。これらによれば、田中城が落城した時の悲話を語り継ぐ神社であるという。間接的ではあるが、無名の和仁石山城と著名な田中城との繋がりが伺い知れる。総じて町内の城跡群の中で、隣町の田中城との関連が推定できるのは、この和仁石山城だけである。

〔和仁石神社〕

「和仁石さん」とよばれており、田中城が、天正15年（1587）の「肥後国衆一揆」で落城した時の悲話に関連する神社である。和仁親範（城主和仁親實の弟）の妻が菊池川の和仁淵に身を投げ、このことを村人が哀れみ、当初、菊池川の川岸に祀ったが、後に洪水を避けて、現在の地に移転したと伝えられている。

『肥後国誌』の「玉名郡　南関手永　和仁村」の項に「和仁殿淵」の詳しい記述がある。「天正15年12月に田中城が落城した時、城主親實の弟親範は妻子を城から出した。この時、親範の妻は13歳になる女の子を連れていた。女の子は、城下の川に身を投げたので、その場所の石を和仁石とよんでいる。妻は川沿いに三里余りくだって、内田村の淵に身を沈めたので、その場所を和仁淵とよぶ。その霊が祟ったので、土地の人は、水神として祀った。石祠がそれで、和仁御前とよんでいる。土地のいい伝えに、田中城が落城した時、親實の妻は東勝寺へ逃れたが、佐々成政が火を放ったので、女の子を連れて和仁石まで来た。ここから、三度身

第３図　和仁石山城跡周辺地形図および大字内田の字図

を投げたが死ねなかった。そこで、女の子を連れて和仁淵まで行き身を投げたが、それでも妻は死に切れず、和仁石に帰って、そこで身を投げた。毎年、４～５月の梅雨の頃、風雨がにわかに荒くなると、村人は、和仁御前が、和仁淵にお出でになったとして、供物と神酒を器に入れて、川の淵に奉げた。須臾にして、器が一旦、川底に沈んで再び水上に浮くと、器は空になっていた。５日～７日間、どこからともなく幽かに轟く太鼓の音を、近村の農夫は毎年聞いた。その日数が過ぎれば風雨が収まり、天気は快晴となった。この時、和仁御前が内田の淵にお帰りになったと村人は語り合った。閏月のある年は、なお更であった」。

また、『和仁軍談』には「親範の妻が13歳の女子を連れて城を出た。女の子は、城下の川に身を投げたので、その場所を和仁淵という。妻は河下を三里ほど行って内田の淵に身を投げたので、その場所を和仁石川という。後の人が、その霊を一社に祀って和仁御前とよんだ」。

また同書内の『南関志』には「辺春伯耆守の妻は、和仁勘解由の女で、故あって、入水したので和仁淵という。伯耆守は辺春親行の弟というが、この説は信用し難い」とある。

和仁淵については、同じく『肥後国誌』の「玉名郡　内田手永」の内田村の項に「鰐石淵」として記されている。「鰐石淵は、当郡上和仁村にありと言うが誤りで、和仁殿淵と言う」とある。さらに追加記事として「南関手永和仁村の条に言う」として、和仁殿淵の説明が、短縮して述べられている。

内田神楽について

和水町総合教育課文化係参事　居石裕臣

古老によると、内田の神楽は、戦時中も欠かさず奉納が行われており、未だ一度も絶えたことのない神楽である。

１．吉見神社（通称：赤子宮、地元では本宮さんとも呼ぶ）　所在地：大字内田字宮脇

祭礼の日は、10月12日であるが、平成18年より「体育の日」前日の日曜日に行うようになった。

神楽は、地元の消防団で奉納している。９月１日から宮籠りが始まり、節頭組から六つの組が順番に宮籠りを行う。この６日間は、各組から供飯が毎日奉納される。練習終了後、その供飯を神楽組で食している。節頭組は、石橋組・本村組・出目組・六反田組・大城戸組・古閑組が順番に回る。

また、宮籠りに併せて９月１日から神楽の打ち込みが始まる。その日は、一座神楽を奉納し、区長をはじめ三役を案内し、手弁当で酒を酌み交わす習わしである。

翌日から神楽の練習が始まり、神楽当日までの間、ほとんど毎日、お宮で練習を行う。練習時間は、基本的に午後8時～10時、本番前の１～２週間は午後11時過ぎまで行っている。

祭り当日は、まず神楽組と節頭で湖取り（水汲みおよび手洗い）に行く（赤子宮や金比羅宮は、内田地区に流れる九郎丸川で行う）。この湖取りは、昔は裸で川の中に入っていたが、現在は行っていない。御幣と御神酒を神楽の楽（笛・太鼓）で奉納し、手を洗い身を清める。その後、赤子宮に戻り、赤子宮例大祭が行われる。

昼神楽は、神主の祝詞奏上・玉串奉奠・神楽の順に奉納を行う。昼神楽を二座奉納後、その年の節頭組の名前を記入した紙を三宝の上に乗せ、神主が御幣で吊りあげる「おみくじ」で節頭が決められる。その後「一剣」を奉納し、昼神楽は終了する。昔は、昼神楽で五座奉納していた（現在の三座の他に「二幣」と「二剣」が行われていた）。夜神楽は、午後７時の供太鼓に始まり、その後、順次、神楽を奉納する。夜神楽も昔は「弓」が行われていた。

昼神楽	座	舞名	呼び方	人数
	一座	三方	さんぽう	1
	二座	榊	さかき	2
	三座	一剣	いっけん	1

夜神楽	座	舞名	呼び方	人数
	一座	三方	さんぽう	1
	二座	榊	さかき	2
	三座	一剣	いっけん	1
	四座	二幣	にへい	2
	五座	二剣	にけん	2
	六座	四剣	しけん	4
	七座	弓剣	ゆみつるぎ	2
	八座	歌舞	うたまい	1
	九座	地方	じかた	1
	十座	一天	いってん	1
	十一座	二天	にてん	2

2．和仁石神社（地元では和仁石（わにいし）さんと呼ぶ） 所在地：大字内田字和仁石

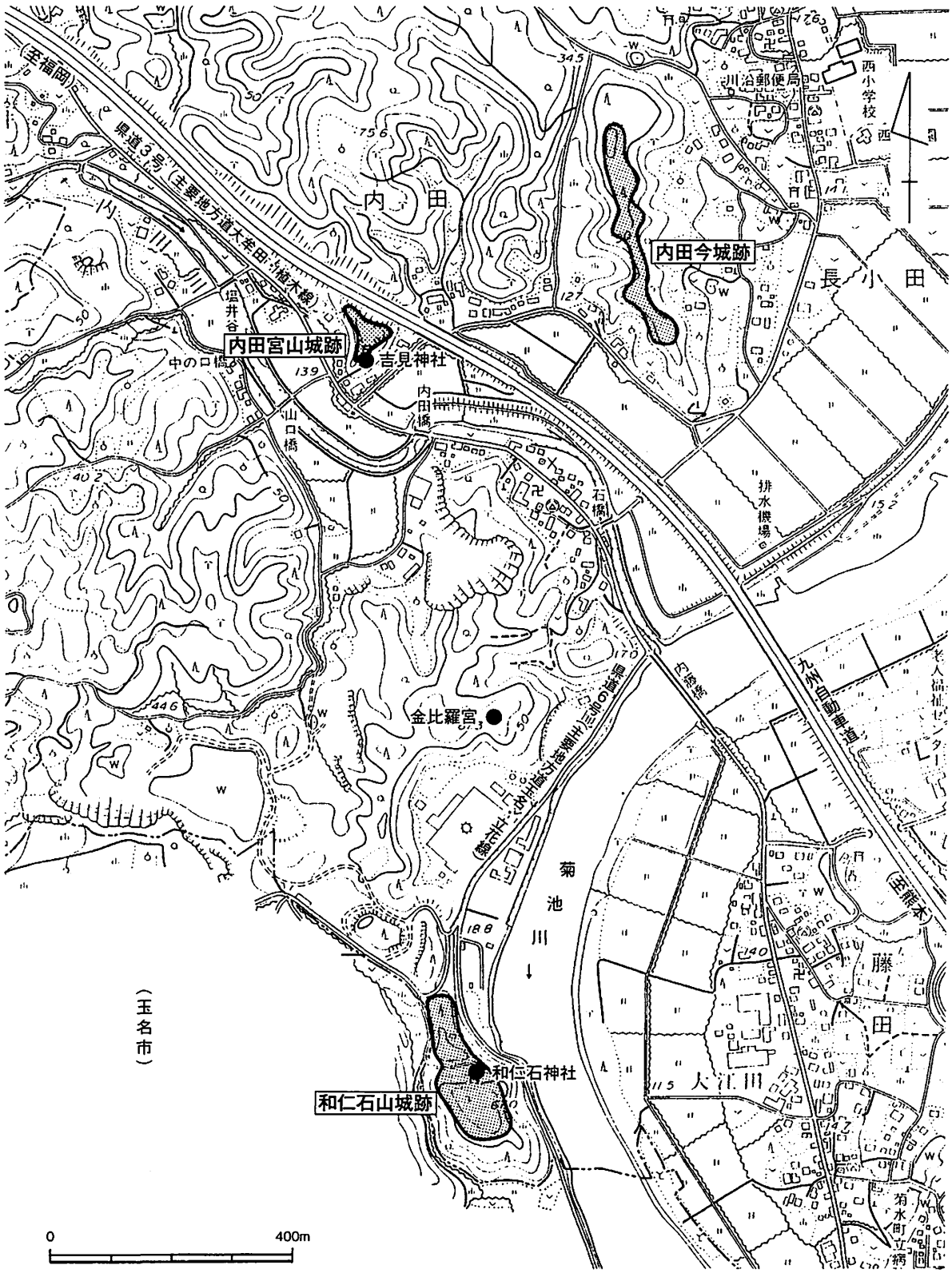
祭礼の日は、旧暦の６月18日であるが、現在は「祭礼の日」の前の日曜日に神楽の奉納を行う。湖取（しめと）りは菊池川で行っている。この湖取りも、昔は裸で菊池川に入っていたが、現在は行っていない。神楽は、吉見神社の昼神楽と同じである。ここも節頭組が祭礼の準備を行う。新しい節頭は、吉見神社と同じく「おみくじ」で決められる。

神楽　一座　三方
（撮影：平成16年8月1日）

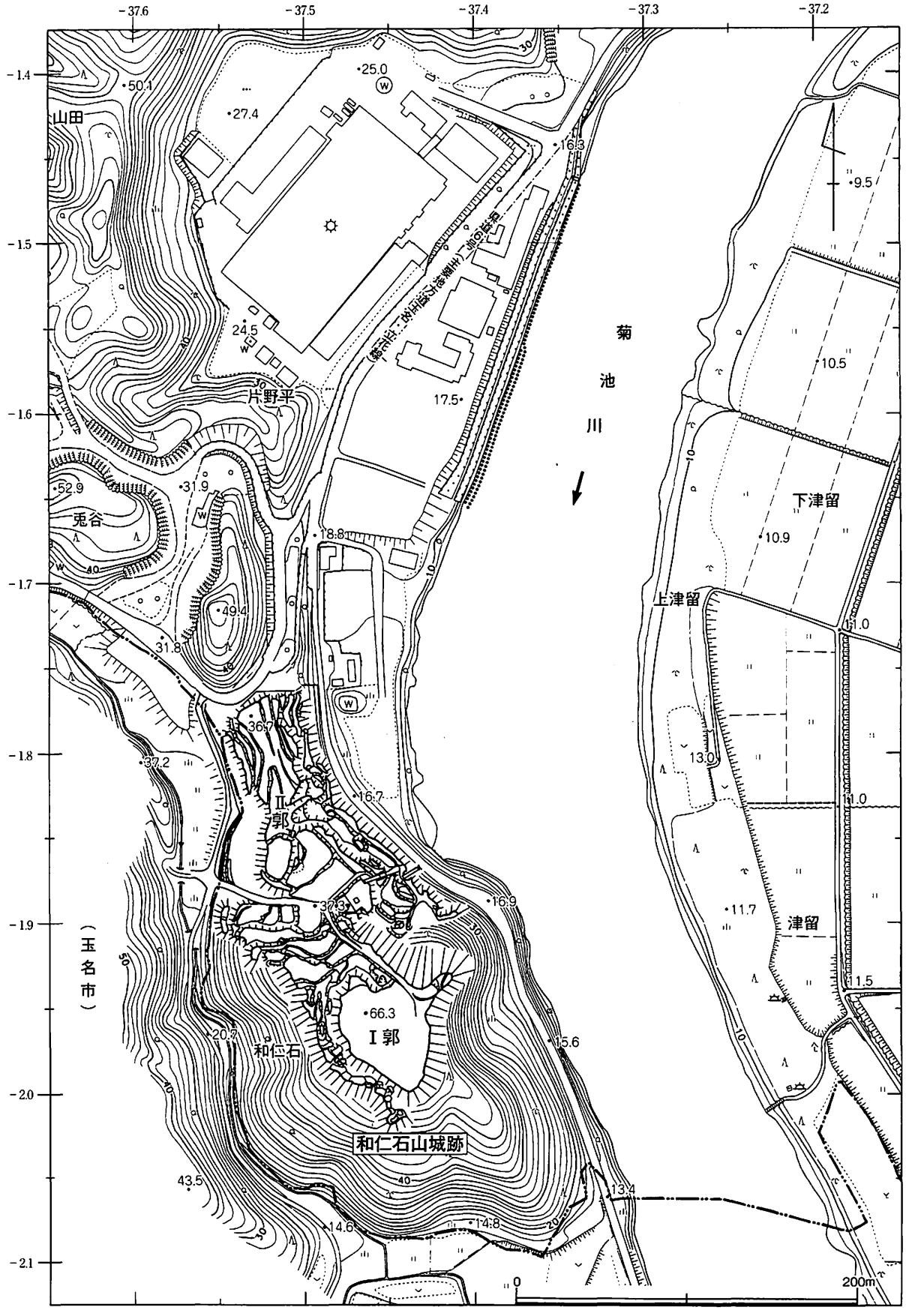
神楽奉納の様子
（撮影：平成16年8月1日）

3．金比羅宮（地元では金比羅（こんぴら）さんと呼ぶ） 所在地：大字内田字長迫

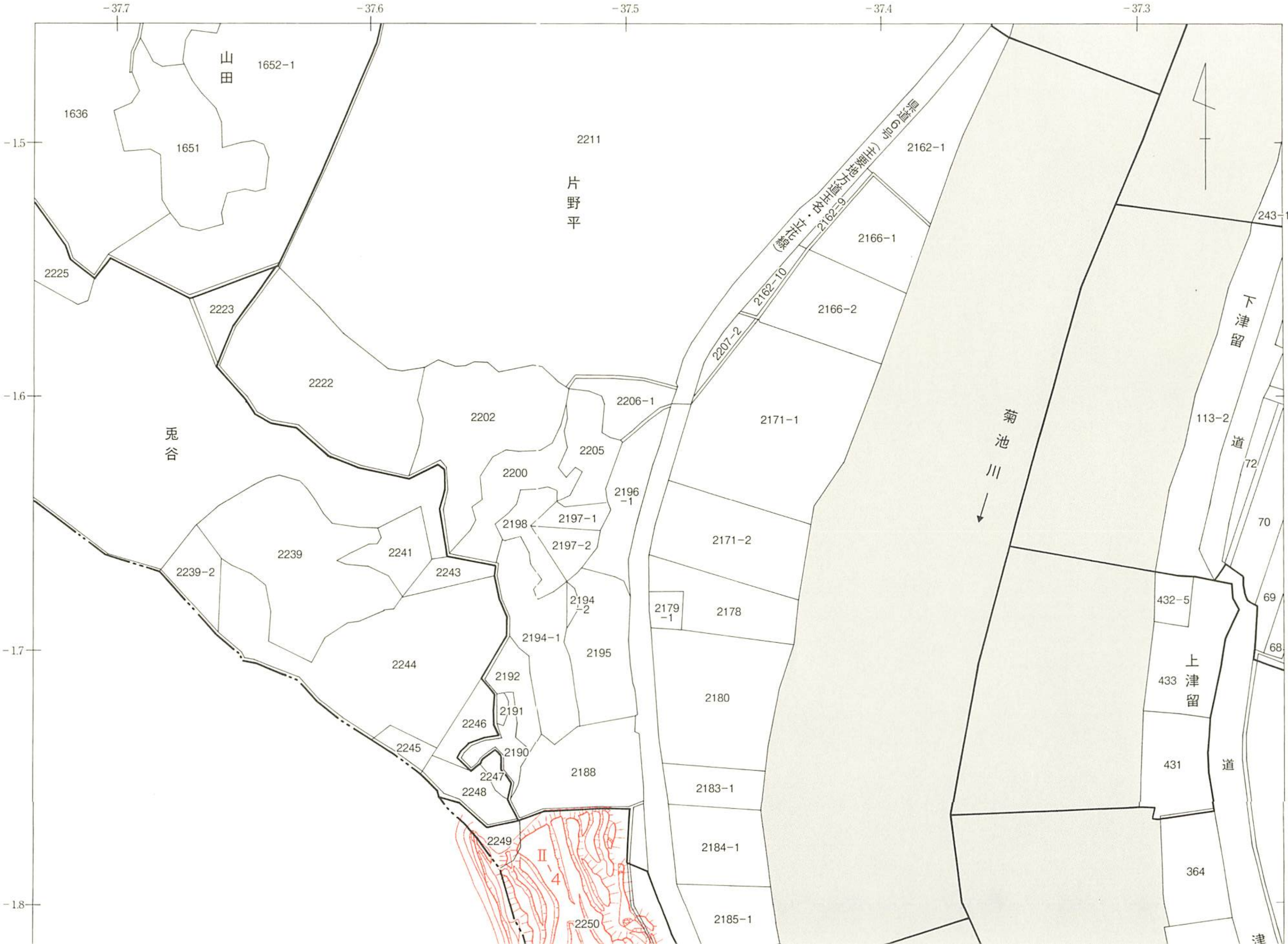
祭礼の日は旧暦の３月10日であるが、ここも「祭礼の日」前の日曜日に神楽の奉納を行っている。和仁石神社と同じく、神楽は吉見神社の昼神楽を奉納し、節頭組が祭礼の準備を行う。吉見神社や和仁石神社と同じで、新しい節頭は「おみくじ」で決められる。



第４図　内田地区三社・三城位置図



第５図　和仁石山城跡周辺地形図


-37.7
-37.6
-37.5
-37.4
-37.3
-1.5
-1.6
-1.7
-1.8
山田
1652-1
1636
1651
2211
片野平
県道6号（主要地方道玉名・立花線）
2162-1
2162-9
2166-1
2166-2
2162-10
2207-2
2171-1
2171-2
2178
2179
-1
2180
2183-1
2184-1
2185-1
菊池川
243-1
下津留
113-2
道
72
70
69
68
432-5
433
上津留
431
364
津
2225
2223
2222
兎谷
2202
2206-1
2205
2200
2196
-1
2198
2197-1
2197-2
2239
2241
2243
2239-2
2194
-2
2194-1
2195
2244
2192
2191
2246
2190
2245
2247
2248
2188
2249
Ⅱ-4
2250

第６図　和仁石山城跡周辺地籍図

第Ⅱ章　調査の成果

縄張りは、城山（Ⅰ郭）を核として、北西側の丘陵地（Ⅱ郭）へ展開している。Ⅱ郭域・北西端の堀切は、規模を拡大して、今日、採石場へ通じる道路に転用されている。

Ⅰ　郭

小山の山頂は標高66.33m、東下の県道６号（主要地方道玉名・立花線）とは49.4mの比高差がある。低山地域の中にあって、選地は内田地区の宮山城跡や今城跡に極めて似ている。典型的な平山城である。

〔山頂域〕

削平の度合いが低く、確たる平地を有しない。ほとんど自然地形に近く、城地の中心部としては異例である。長軸65m、短軸30m、全体が緩傾斜地で、北西側の最高所と南東端の比高差は3.2m。東縁に立てば、菊池川をはじめ、菊水町江田の中心部が一望できる。物見の場としては最高の条件下にある。

〔作業道〕

重機が切り開いた新設の道で、Ⅰ郭の北東下を上っている。標高37.3mの駐車場から標高55.4mの地点まで切り開かれており、道幅は2.4～6.0m。古道の転用ではないことを明記しておきたい。

〔北東側斜面〕

標高56mから標高64mまでは、緩やかな山腹となっている。図面上では、幅16m分が自然地形のままである。他の城跡では、小段や帯状地形が連なる箇所である。

〔東側斜面〕

石切り場跡で絶壁状態にある。近くから見れば岩肌が露呈している。ただし、斜面部は草木で覆われているので、遠目の菊池川対岸からは余りこの状態が分からない。

〔南東側下〕

町教委が作成した地形図には、標高55mから標高50mの範囲に山頂からの張り出し地形が描かれている。測量調査を試みたが荒地に加えて、東縁は石切りによる絶壁で、安全面を考慮して作業を断念した。

〔南側下～西側下〕

標高55mから標高52mの間に帯状の削平地が巡っている。山頂域の縁からは８mの比高差があり、間の法面は急斜面をなしている。ただし、法面は自然地形によるもので、削り落としによるものではない。削平地は細かなブロックに分かれて、多少の高低差もある。大方の城跡地で見られる帯状地形とは形状が異なり、この城跡に特有な縄張りと捉えてよい。

〔北西側下〕

削平地の形状は通常の帯状地形に変化する。平地は、西側で標高53m強・最大幅７m、北側で標高51m強・最大幅８m。北側は、途中で削平が止まっている。

〔Ⅰ郭の北西直下〕

地形の傾斜に沿って、上下三段に分かれる。いずれも削平の度合いは強く、幅広の帯状地形をなす。細分される各段は横並びになっており、Ⅰ郭に直結する区画である。

一段①～③：①は形の整った平地で、標高48.4～49m、長さ16m、幅９～５m。②も同様で、標高51.4～50m、長さ27m、幅13～７m。端部の③に限っては小段に近く、中央部の標高46.5m、長さ11m、幅５m。①・②の平地は特に目立っている。

二段④・⑤：いずれも極端な細帯地形で、犬走りの様である。④は長さ20m、幅は北東端で４m、南西端で極端にすぼまる。一段①との比高差は1.8m。⑤は長さ16m、幅は中央部で2.8m、一段②

との比高差は3.7m。通路の性格を持った地形である。

三　段　⑥：一段と同様に完全な平地で、中心部の東側半分が弧状を呈する。全長51m、最大幅は10m。二段⑤との比高差は2.5m。西側寄りは、すぼまって細帯地形となり、長さ12m、幅５～１m。緩斜面部を余すところなく利用した区画である。

〔Ⅰ郭の北西下域〕

四段と五段は、東側を駐車場の造成で削られている。削平地の状況も一段～三段とは異なる。

四　段　⑦：全体の三分の二が帯状地形で、残りの東寄りは駐車場となっている。東端の標高41.2m、西側への緩傾斜地で4.2mの比高差がある。

五段⑧～⑩：東域は駐車場になっている。西側への段状地形でいずれも完全な平地である。⑧は、標高35.4m、長さ10m、幅９m。⑨は⑧との比高差1.1m、長さ11m、幅11～４m。⑩には、プレハブ小屋が建つ。

Ⅱ　郭

〔Ⅱ郭－１〕

標高は南端で42.1m、北端で42.6m、楕円形の平地である。南北方向に主軸があり、長さ26m、幅は中央部で13m。この郭を中心に、北側区域の帯状丘陵に縄張りが展開する。一部の例外を除いて基本的に丘陵地は北への緩傾斜地で、丘頂ラインにⅡ郭－２～４の平地が確保されている。

〔Ⅱ郭－２〕

歪な台形状の平地で、Ⅱ郭－１との比高差は2.2m、主軸方向の長さ11m、幅15m。南北両端の法面は削り落とされている。Ⅱ郭－１に直結する区画で、ここまでは完全な平地を保つ。

〔Ⅱ郭－３〕

鋭角三角形状の区画で、Ⅱ郭－２との比高差は２m。上面の削平はやや甘く自然地形が残る。長さ27m、幅は南端で9.5m、北端で２mにすぼまる。南北両端の比高差は0.8m。

〔Ⅱ郭－４〕

南側寄りでⅡ郭－３が食い込む格好になっている。全長63mの広い区画で、段差はないが４（ａ～ｃ）に細分される。

４ａ：Ⅱ郭－３の東下で比高差は0.4m、完全な平地である。帯状形をなし長さは24m、幅は南側寄りで7.5m、北端で４m。

４ｂ：Ⅱ郭－３の西下で南端での比高差２m、４ａと比べるとかなりの段下りとなる。造りは４ａと同様で、長さは22m、幅6.5～４m。

４ｃ：丘頂ラインに造成された区画で、全長38m。幅は南側寄りで５m幅にくびれるが、対照的に北端で16m幅に拡大してラッパ状に開く。この区画は高低差の面で特色がある。南端のくびれ部では一旦窪んで、そこから先で再び高さが復活している。南北両端の比高差は0.9m、この事から南端の箇所に堀切の埋没が予想される。平地については、中央部から北端にかけて削平の度合いが強い。北端の法面は後世に削られ、今日、採石場への作業道が通っている。作業道は堀切を転用したものと考えられる。

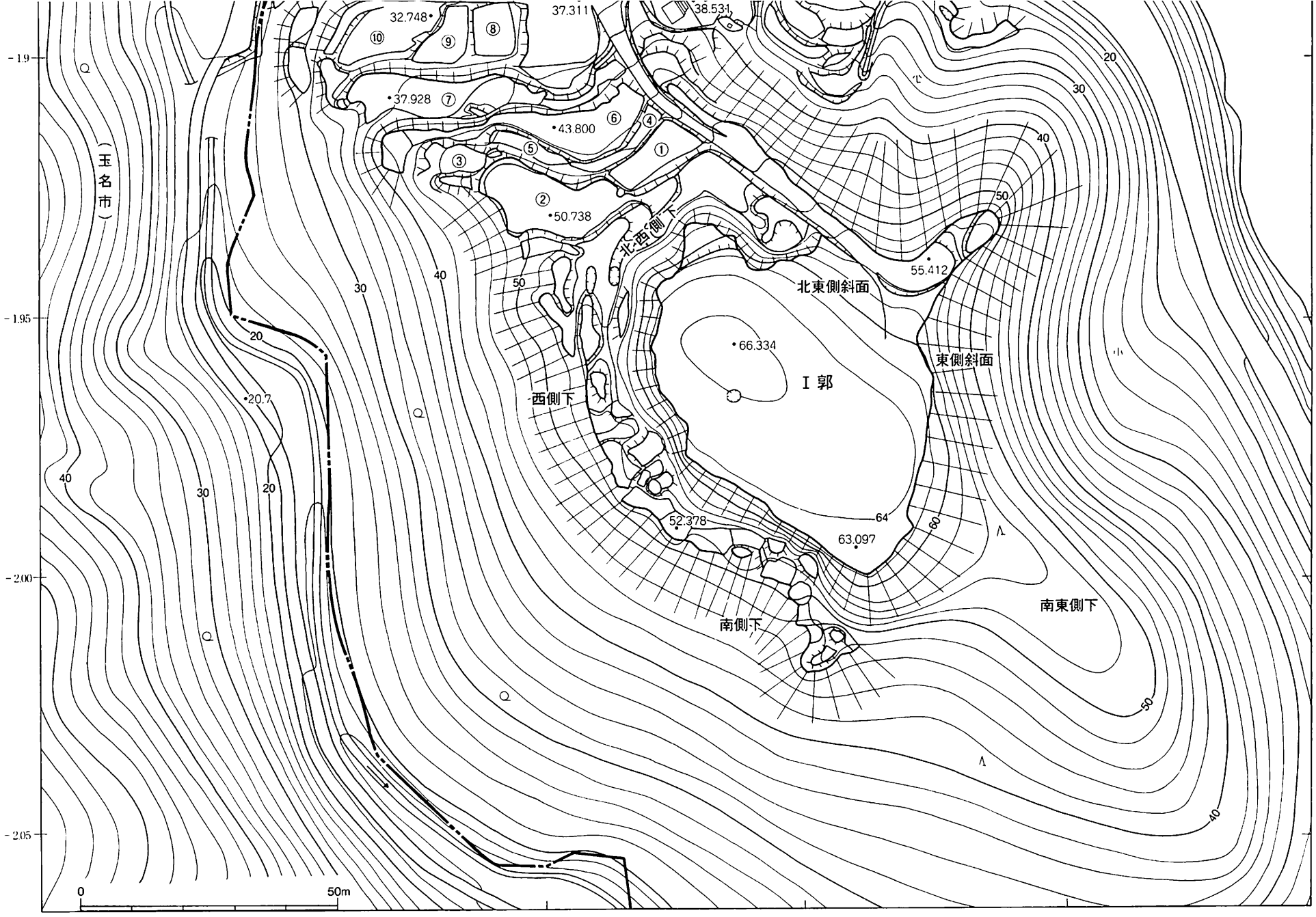
〔北側丘陵地の西斜面〕

Ⅱ郭－４に限っては、西側斜面に４（ｄ～ｆ）の三段からなる弧状の帯状削平地が見られる。

４ｄ：Ⅱ郭－４との比高差は中央部で1.2m。全長43m、幅は２～４m。南側域ではⅡ郭－４ｂの下位にかかる。

４ｅ：４ｄとの比高差は1.5m、全長27m。幅は両端ですぼまり中央部で３m。平地の削平度合いは強い。

-37.55
-37.5
-37.45
-37.4
-1.75
-1.8
-1.85
•49.4
40
Q
•31.191
（堀切）
•28.271
5g
36.701
Ⅱ郭、4c
Ⅱ郭-5
4f
4e
4d
4b
Ⅱ郭-3
4a
30
Ⅱ郭-2
42.616
Ⅱ郭-1
25.866
Ⅱ郭-7
Ⅱ郭-8
Ⅱ郭-6
37.241
37.096
•16.7
•26.331
10e
10d
10c
10b
Ⅱ郭-10a
•26.096
和仁石神社
Ⅱ郭-11
菊池川



第７図　和仁石山城跡全体測量図

４ｆ：４ｅとの比高差は2.63m。西縁は歪な形をしており、全長38m、最大幅4.5m。

〔北側丘陵地の東斜面〕

Ⅱ郭－４ａと４ｃの東下にⅡ郭－５がある。地形的にはⅡ郭－４ｃの南端と繋がっており、比高差は0.4mに過ぎない。それでも北端ではⅡ郭－４ｃと２m、南端ではⅡ郭－４ａと1.3mの比高差が生じている。この区画より東斜面には６箇所に帯状の削平地がある。この内、Ⅱ郭－５ｇは極細帯状の削平地で、犬走りの様である。直線状に延びており、長さ38m、幅1.5～５m、北端でラッパ状に開く。Ⅱ郭－５との比高差は1.4m。

〔北側丘陵地の南斜面〕

Ⅱ郭－６は、Ⅱ郭－１との比高差が2.6m。細帯状の削平地で、直線的な延びを見せる。長さ22m、幅は2.5～3.5m。Ⅱ郭－１の付属的な小区画と捉えられる。

Ⅱ郭－７は、Ⅱ郭－１との比高差５m、間に２つの小削平地を挟んでいる。逆「く」の字をした平地で、東側中央部に凸部がある。北半分で長さ26m、西端での幅は10m、南半分で長さ22.5m、幅は中央部で13m、南端で７m。

Ⅱ郭－８は窪地で、Ⅱ郭－７との比高差は0.3mに過ぎないが、堀切のような形状をなす。長さ30m、幅13～15m、上面は平地である。堀切の埋没も考えられる。

〔Ⅱ郭－９〕

小高台のⅡ郭－９は、Ⅱ郭－８との比高差1.6m。現在は和仁石神社の社地となっている。境内は標高38.5m。主軸方向の長さ17m、最大幅18m。南西寄りの神殿箇所は0.5m高く、長さ6.5m、北東縁の幅11m。この神社で奉納される神楽をはじめ、内田地区の神楽については、地元出身の居石裕臣参事が本文中で説明している（５頁参照）。

Ⅱ郭－８・南東縁の参道は、駐車場の造成工事と共に10数年前に新設されたもので古道ではない。北西下の県道から上がる急な石段が、本来の通路である。

〔北側丘陵地の東斜面〕

Ⅱ郭－２の東斜面には小谷が食い込んでいる。Ⅱ郭－７・８の北東斜面には本格的な造りの三段からなる帯状削平地（Ⅱ郭－10）が見られる。

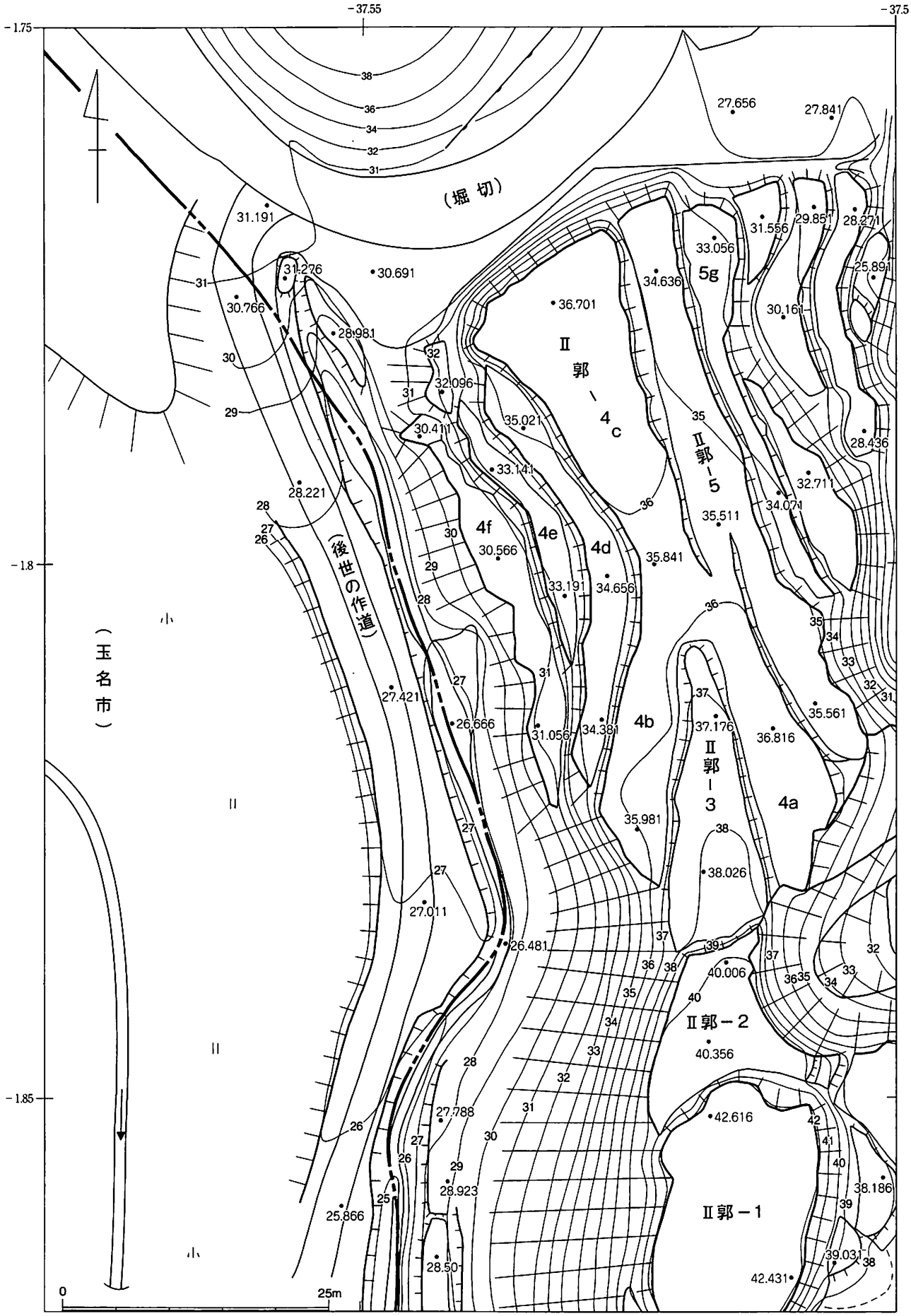
上段10ａ：中央部で、Ⅱ郭－７北東縁との比高差は2.1m。長さ37.5m、幅５～２m、平地の削平は三段とも非常に強い。

中段10（ｂ～ｄ）：10ｂは、10ａとの比高差が7.4m。間に二段の小段を挟んでいる。長さ21m、幅４～３m、典型的な帯状地形である。10ｃは、10ｂと10ｄの間にあり、一段高くなっている。10ｂとの比高差は1.3m、長さ8.5m、幅４m。10ｄは、10ｃとの比高差0.3m、やや幅広の帯状地形で、長さ17.5m、幅７～5.5m。

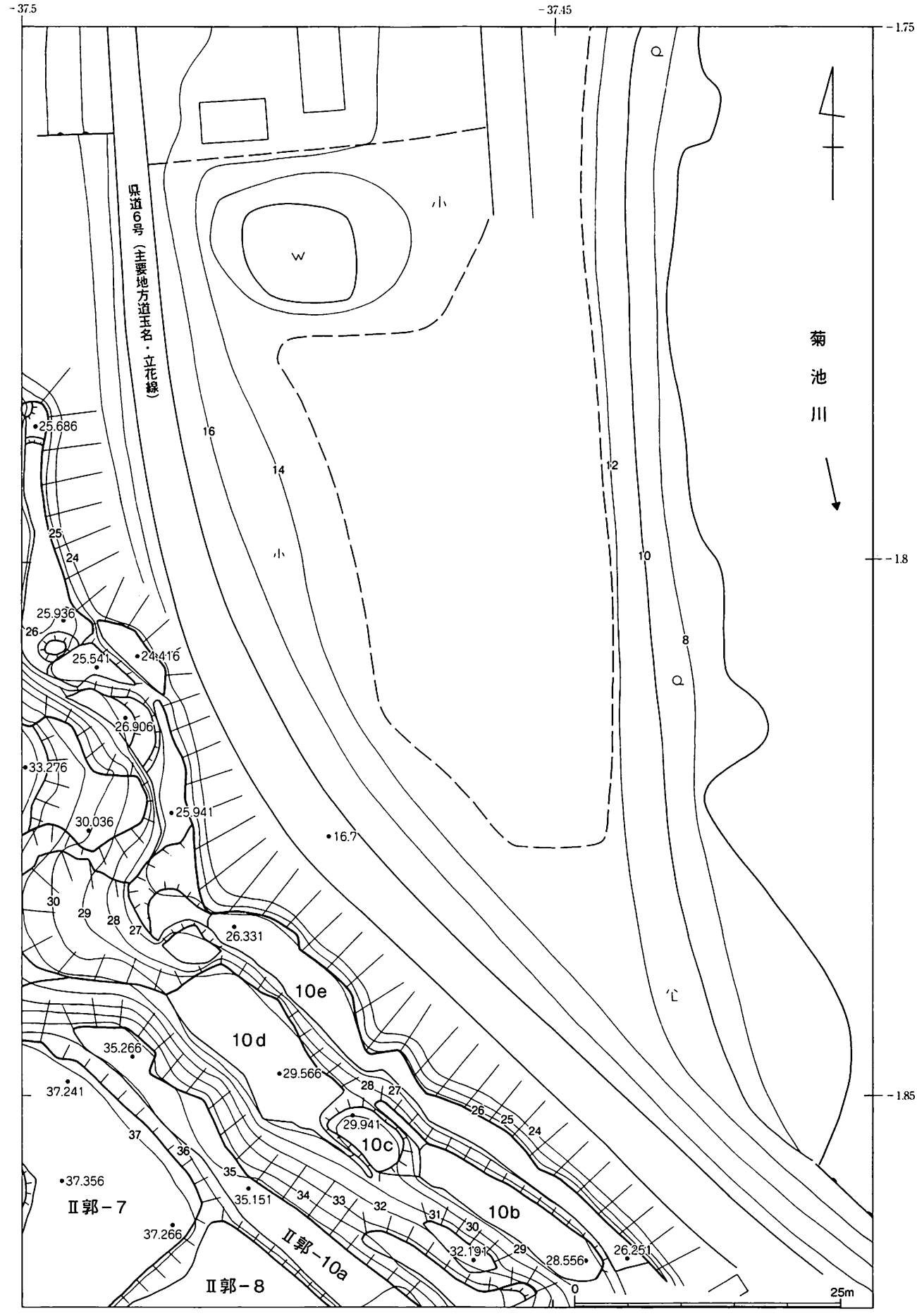
下段10ｅ：犬走りの様な帯状地形である。南東端で10ｂとの比高差は2.3m。全長51m、幅２～４m、所々切れているが、元来、さらに北へ延びてⅡ郭－４北下の堀切（採石場への作業道）へ通じていたと推定される。一方、南東側への延長も考えられるが、最端部は県道工事の際に削除されている。元来は通路の役割を担った地形と考えられる。

〔Ⅱ郭－11〕

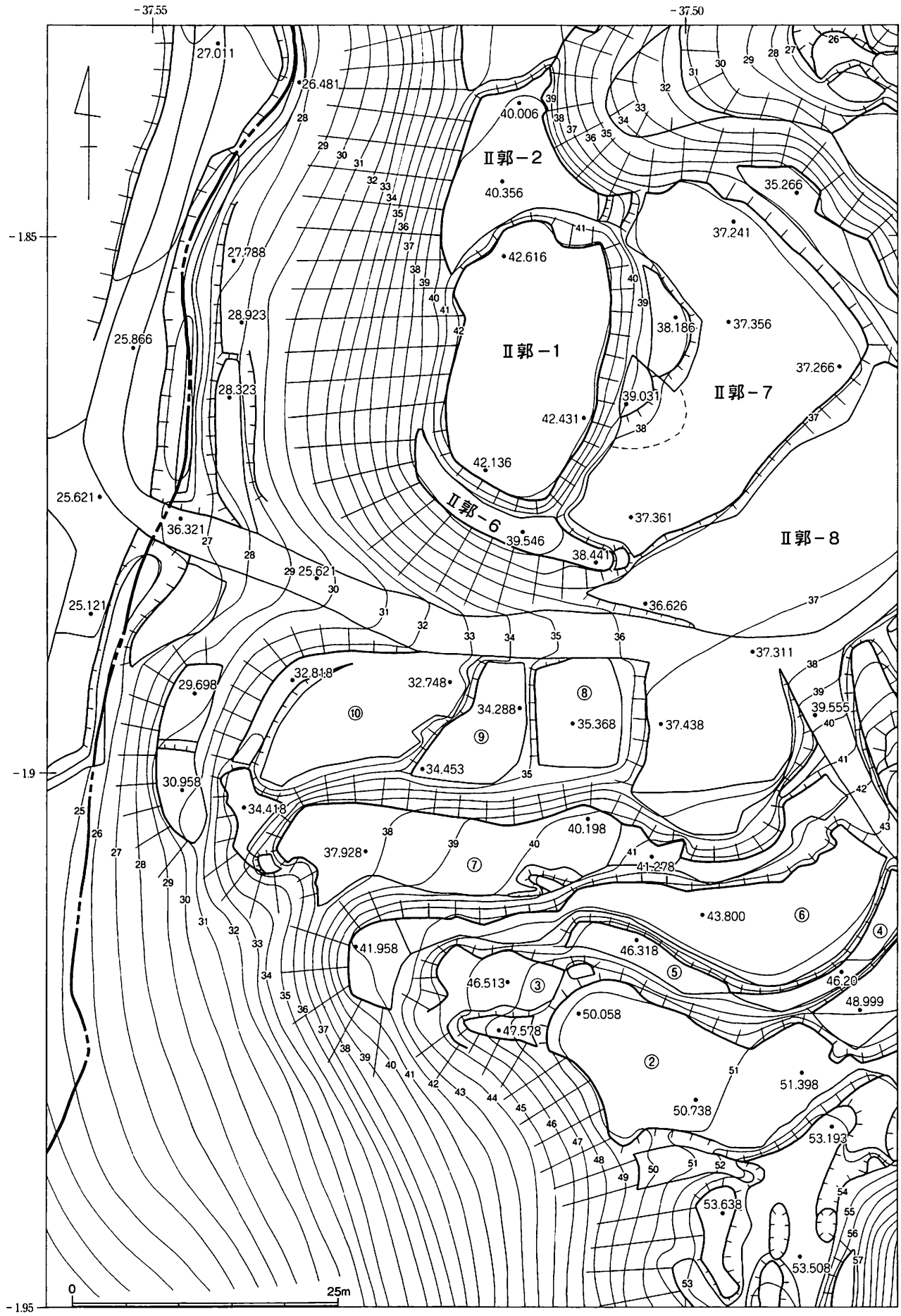
Ⅱ郭－９東下の小谷には、谷頭から下部に向かって七段の削平地が見られる。この内、標高30m前後のⅡ郭－11は、肉太の「く」の字形をなす。全長28m、中央部の幅は９m。



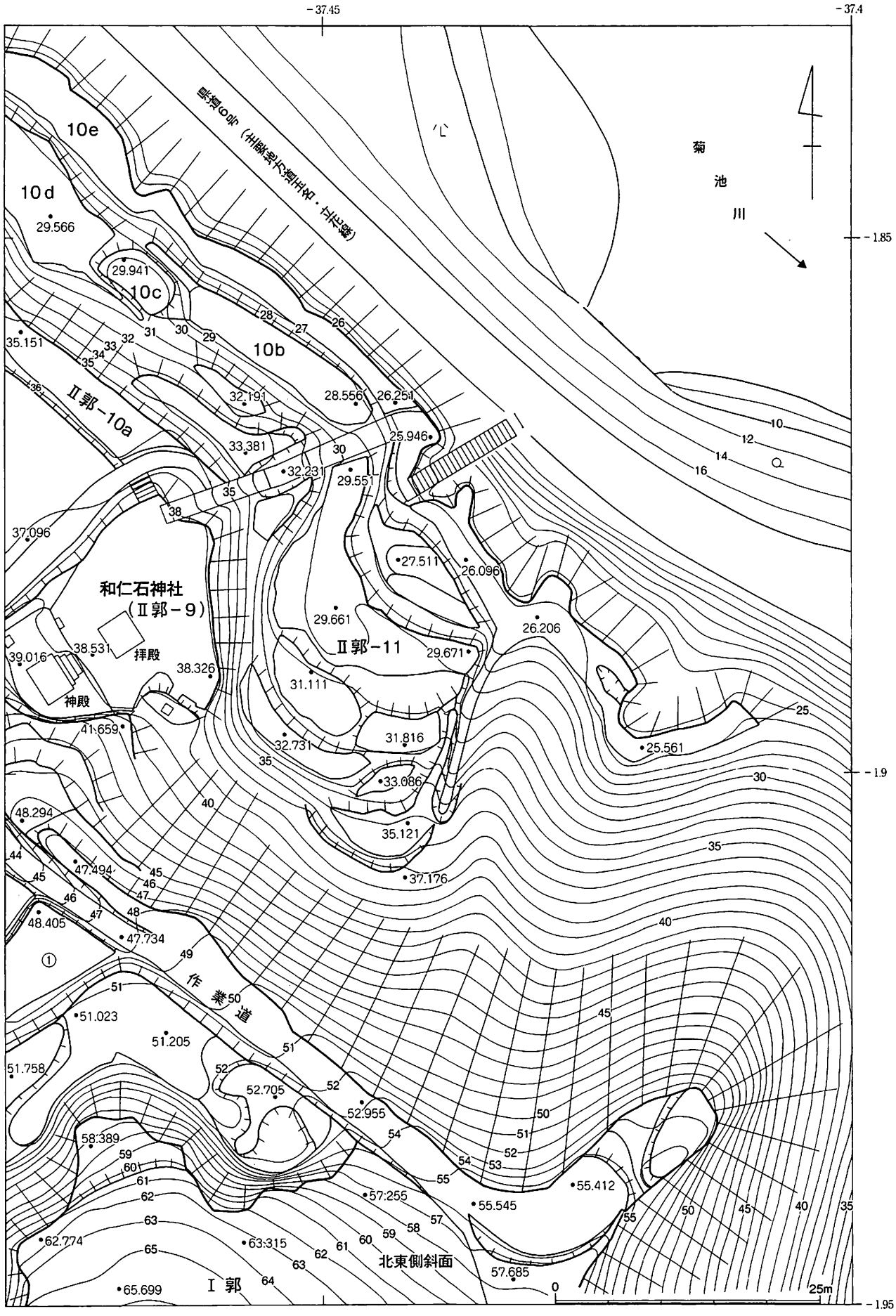
第８図　和仁石山城跡測量図①



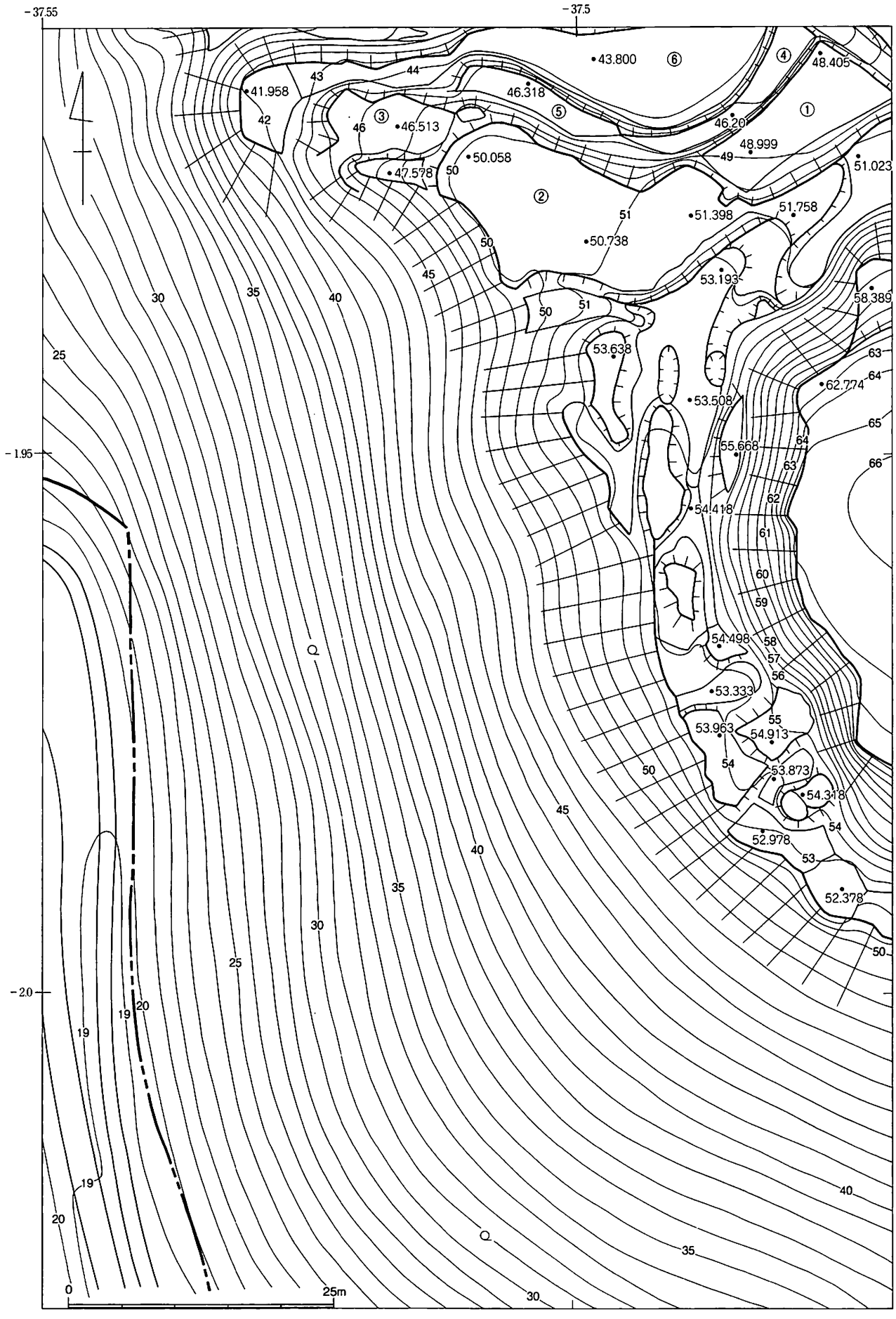
第９図　和仁石山城跡測量図②



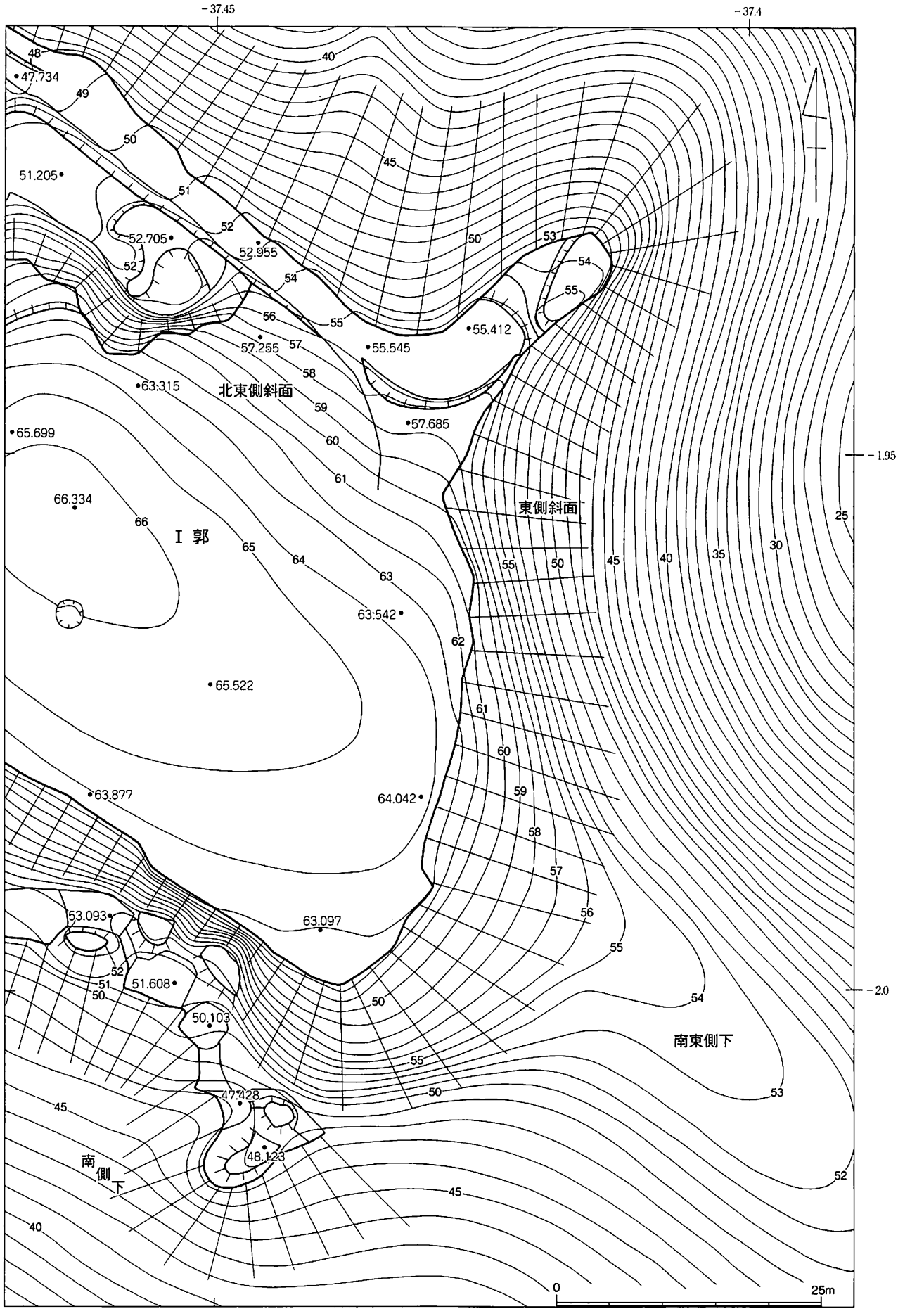
第10図　和仁石山城跡測量図③



第11図　和仁石山城跡測量図④



第12図　和仁石山城跡測量図⑤



第13図　和仁石山城跡測量図⑥

第Ⅲ章　ま と め

①和仁石山城跡の名称は、昭和50年代初期の造語である。城内の神社名から付けられたもので、同じ内田地区の二城跡とは違う命名が行われている。これらも当時、新発見の城跡であるが、地名に内田の冠をつけて、内田宮山城跡、内田今城跡と命名された。したがって、この方法を踏襲すれば、当該の城跡も内田城山城跡と命名されなければならない。一方で、和仁石山城跡の方法を採用すれば、内田宮山城跡は内田赤子宮城跡との表現になる。さらに、三城跡を今のままで統一した場合、最低のこととして内田和仁石山城跡となる。逆に内田の冠を外して、他の二城跡を宮山城跡・今城跡と簡略してもよい。

現在、この三城跡の名称は、町教委発行の文化財マップにも掲載されて、定着している。この辺が非常に難しい。中世城跡の名称は新発見の場合、このように見直しが必要なケースも多く、菊水町内に限らず、今後に課題を残している。

②縄張りは、城山の山頂域を軸に展開している。山頂からの展望は、この城跡が物見の砦であることを強く認識させる。菊池川左岸から眺めた山容（山の形）も城地にふさわしい形をしている。しかし、山頂域は自然地形に近い状態で、極めて特異である。他の城跡では、大いに造成されている主要な箇所だけに不思議である。

山頂直下を西側から北側へ巡る帯状地形にも特色がある。上面のカットが非常に甘く、大方、凸凹の状態を呈する。必然的に、いくつものブロックに細分されている。これに対し、これから少し下った北西斜面は、削平の強い幅広な帯状地形で、山頂域とは好対照の縄張りとなる。この状況はⅡ郭を中心とした北側丘陵地にも拡大しており、両者に際立った違いがある。つまり、山頂域を物見の場としてそのまま利用し、城としての付属的な機能を北側丘陵地側に求めた特殊な縄張りであることを示している。

和仁石山城跡が、例え物見の砦であったとしても、山頂域だけでは城としての機能を果たせない事は明白である。実際、城内での居住区域としては、和仁石神社の社地が第一候補に上げられる。場所的にも最適である。Ⅱ郭区域には、倉庫の類が建っていた可能性がある。斜面には犬走りのような地形も見られ、帯状の段状地形も意味を持っている。これらの条件が揃って、はじめて物見の場としての山頂域が生きてくる。

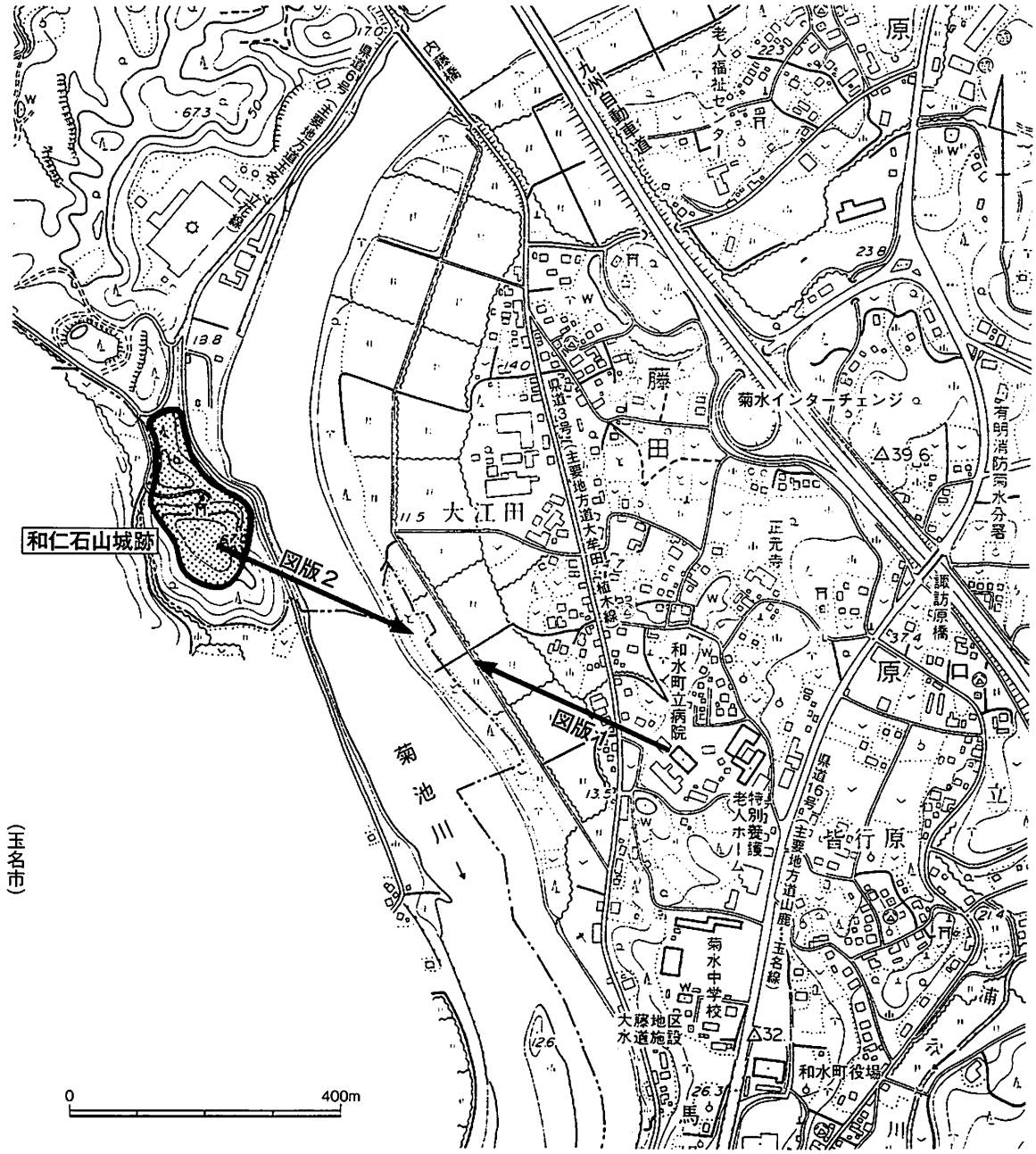
③菊水町内には15箇所に中世城跡が残っている。その中で三加和町にある国指定史跡・田中城跡と関連を有するのは、この城跡だけである。田中城跡は「肥後国衆一揆」の最後の舞台となった所で、落城にまつわる城主奥方の悲話が『肥後国誌』などに詳しい記述がある。この伝承が和仁石神社と深い関わりを持っている。しかし、その接点はどこから生じたのか全く不思議である。実際、両城間は10kmも離れている。和仁石山城の存在理由は田中城に求められるのであろうか。その場合、いかなる役目を担ったのか、多くの疑問が残る。

④今日の行政境では意味をなさないが、町内では三城跡の地理的位置に特色がある。和仁石山城跡は玉名市、江栗城跡は三加和町、焼米城跡は山鹿市との接点に位置している。多くの場合、高山の稜線に築かれた山城にこのケースが見られる。しかし、ここでは、いずれも低山の平山城でのことであり、かつての村落の配置状況を考慮に入れた考察が必要となろう。

一方で、この三城跡は、一級河川の菊池川沿岸に存在している事にも触れておく必要がある。特に、麓集落を伴わない和仁石山城跡は、河川交通の押えの一拠点として配置された感が強い。当時は、かなりの中流域まで舟が遡っていたと考えられる。舟を使用した攻撃も想定する必要がある。日常においては、行き交う舟の監視も求められる。その意味で砦としての役目を担う城跡の存在感が出てくる。これは、主要道路の沿線に分布する城跡群と全く同じである。現に菊水町では、古道と見られる県道３号(主要地方道大牟田・植木線)に接する形で、内田今城跡～江田城跡～牧野城跡～用木城跡が横方向に並んでいる。いずれにせよ、この様な形で和仁石城跡が菊池川の川岸に存在することは、極めて興味深い。

写　真　図　版

※城跡地が内田地区の最南端にあり、玉名市側に食い込む形になっていることが良くわかる。



第14図　写真撮影位置図(1)　　合併前の菊水町作成 1/10,000 地形図を使用

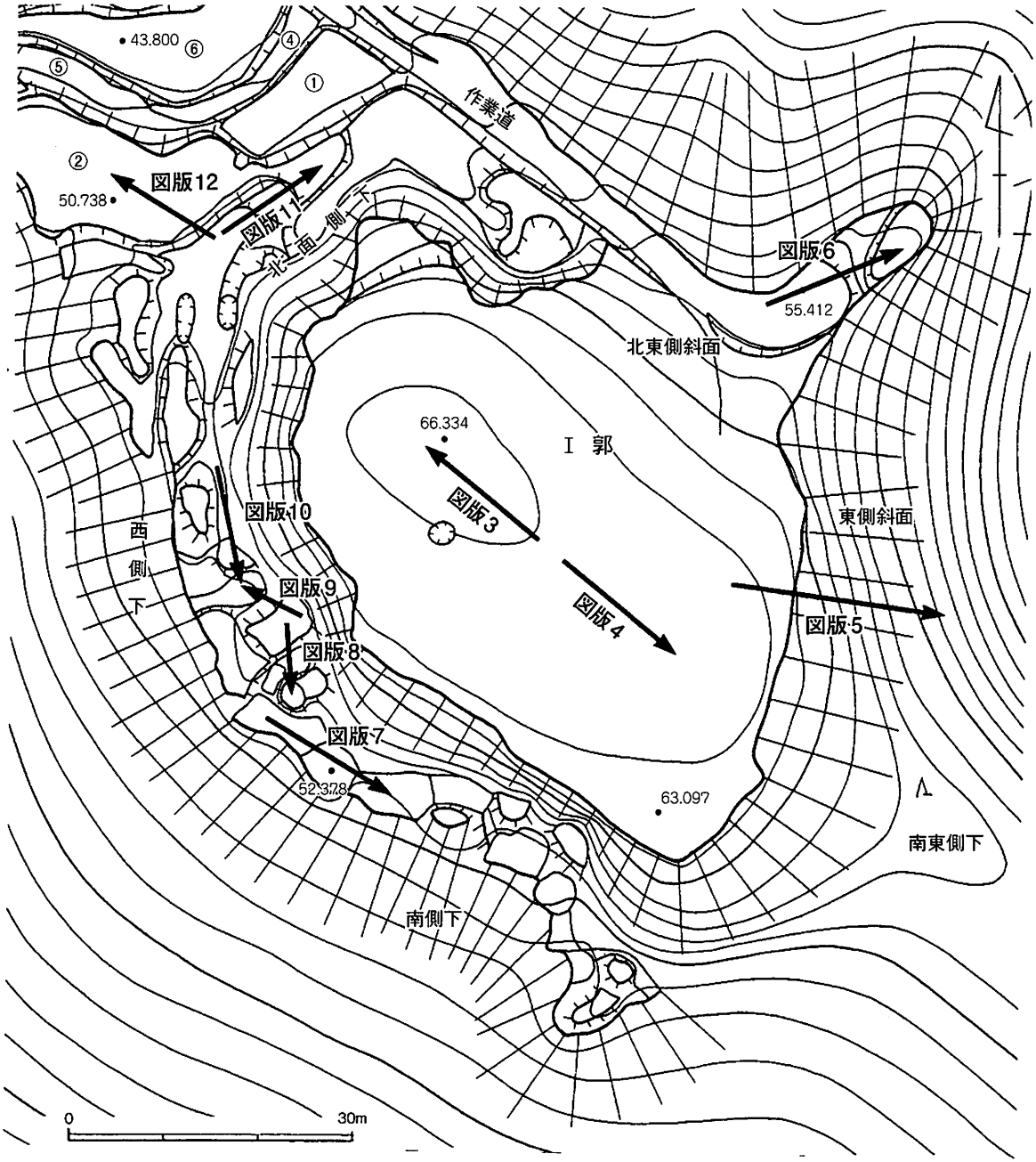
絞り8　速度1／60秒

図版1　和仁石山城跡　遠景　　3頁参照
（菊池川対岸の和水町立病院屋上から望む。ここからは菊池川の流路が望めない）

絞り8　速度1／60秒

図版2　Ⅰ郭東端からの眺望（菊池川と和水町立病院方向を望む）　　3頁参照

※山頂域のⅠ郭での写真撮影箇所を示している。測量図面からは山頂部が自然地形を残した状況にあることがよく分かる。北西側に小山の鞍部がある。



第15図　写真撮影位置図(2)

絞り8　速度1／15秒

図版３　Ｉ郭山頂域（中央→北西）

11頁参照

絞り8　速度1／15秒

図版４　Ｉ郭山頂域（中央→南東）

11頁参照

絞り8　速度1／60秒

図版５　Ｉ郭東端（菊水町の中心部が望める）　３頁参照

絞り8　速度1／60秒

図版６　Ｉ郭東側下（崖面は石切り場跡で、絶壁状態にある）　３頁参照

絞り8　速度1／125秒

図版７　Ⅰ郭西側下　帯状削平地（北西→南西）

11頁参照

絞り8　速度1／60秒

図版８　Ⅰ郭西側下　帯状削平地（人物奥の竹林は伐採前の状態）

11頁参照

絞り8　速度1／30秒

図版９　Ⅰ郭西側下　窪地（細かなブロックに分かれ、高低差がある）

11頁参照

絞り8　速度1／30秒

図版10　Ⅰ郭西側下　窪地（北→南）

11頁参照

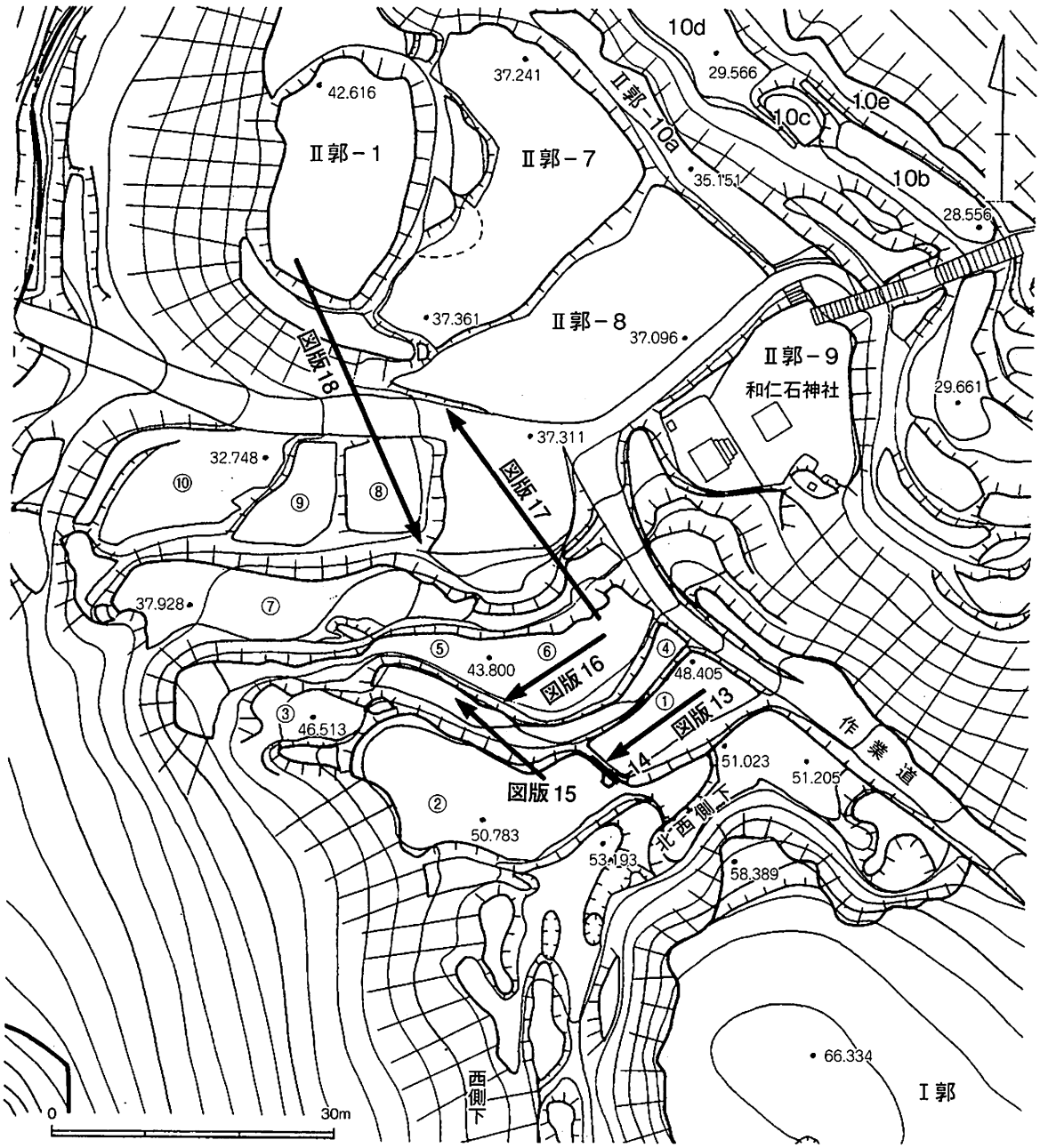
絞り5.6　速度1／4秒

図版11　Ⅰ郭北西側下　帯状削平地（南西→北東）　11頁参照

絞り3.5　速度1／4秒

図版12　Ⅰ郭北西直下　一段②（上段の帯状地形から見下ろす）　11頁参照

※Ⅰ郭とⅡ郭間の写真撮影箇所を示している。山頂域のⅠ郭と異なり、帯状地形や段状地形が集中している。



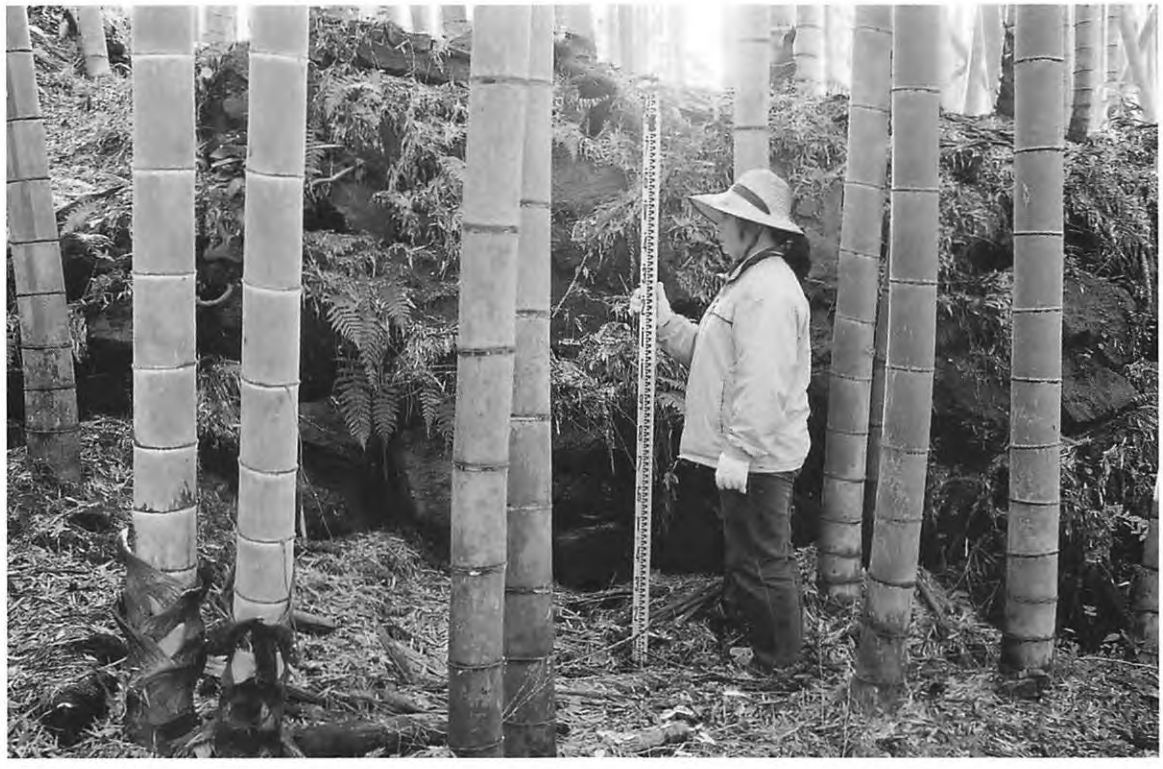
第16図　写真撮影位置図(3)

絞り5.6　速度1／15秒

図版13　Ⅰ郭北西直下　一段①（北東→南西）

11頁参照

絞り5.6　速度1／4秒



図版14　Ⅰ郭北西直下　一段①南西壁面
（壁面には石積みが見られるが、城時代のものかは不明）

絞り5.6　速度1／4秒

図版15　Ⅰ郭北西直下　二段⑤（上段の一段②から見下ろす）

11頁参照

絞り5.6　速度1／15秒

図版16　Ⅰ郭北西直下　三段⑥（北東→南西）

12頁参照

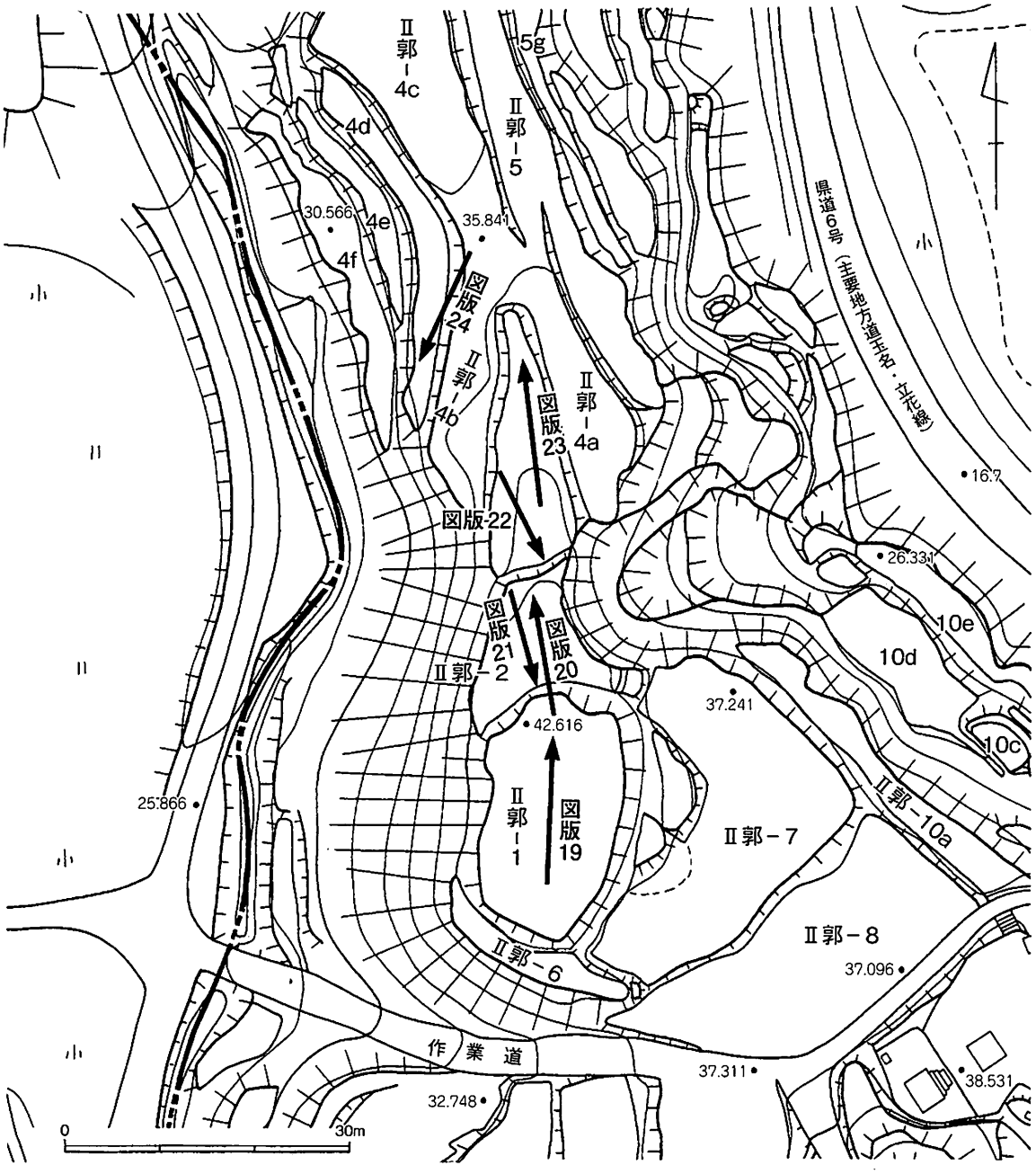
絞り5.6　速度1／15秒

図版17　Ⅰ郭北西下域（三段⑥から見下ろす）　12頁参照

絞り5.6　速度1／15秒

図版18　Ⅰ郭北西下域（Ⅱ郭－1から見下ろす）　12頁参照

※Ⅱ郭域の丘頂ラインは、造成された平地が目立つ。図版19～23は、これを撮影したもの。Ⅰ郭とは際立った違いを見せている。ただし、西側斜面の線引きは、やや甘い。



第17図　写真撮影位置図(4)

絞り5.6　速度1／15秒

図版19　Ⅱ郭－１（南→北）

12頁参照

絞り5.6　速度1／15秒

図版20　Ⅱ郭－２（南→北）

12頁参照

絞り5.6　速度1／15秒

図版21　Ⅱ郭－１北側法面の削り落とし

12頁参照

絞り5.6　速度1／30秒

図版22　Ⅱ郭－２北側法面の削り落とし

12頁参照

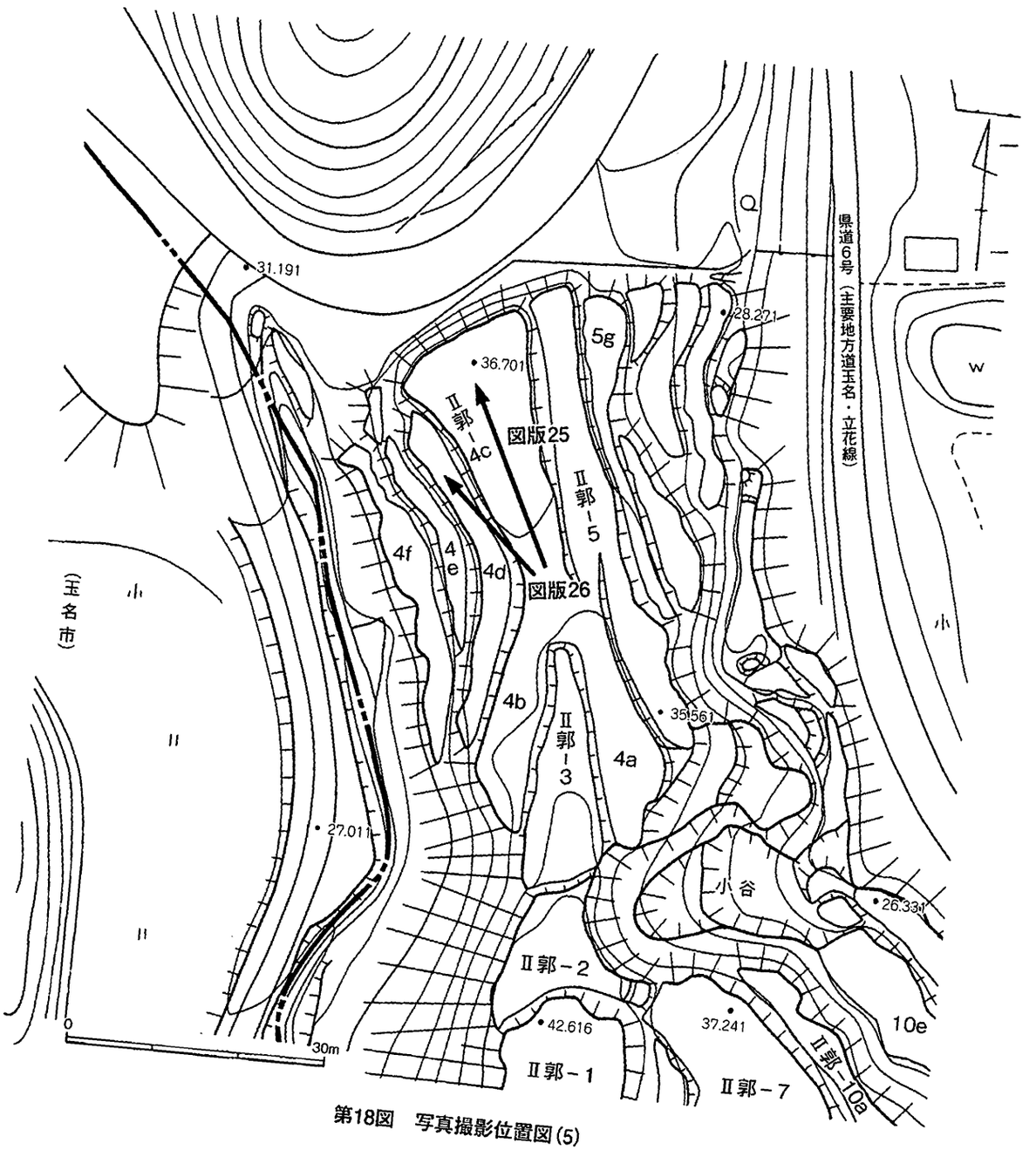
絞り5.6　速度1／15秒

図版23　Ⅱ郭－３（南→北）　12頁参照

絞り5.6　速度1／30秒

図版24　Ⅱ郭－4d南端部（上段のⅡ郭－4cから見下ろす）　12頁参照

※Ⅱ郭－4cと西側斜面の状態を撮影したもの。図版25からは、Ⅱ郭－4cの平地の様子が分かる。



第18図　写真撮影位置図(5)

絞り5.6　速度1／60秒

図版25　Ⅱ郭－4c（南→北）

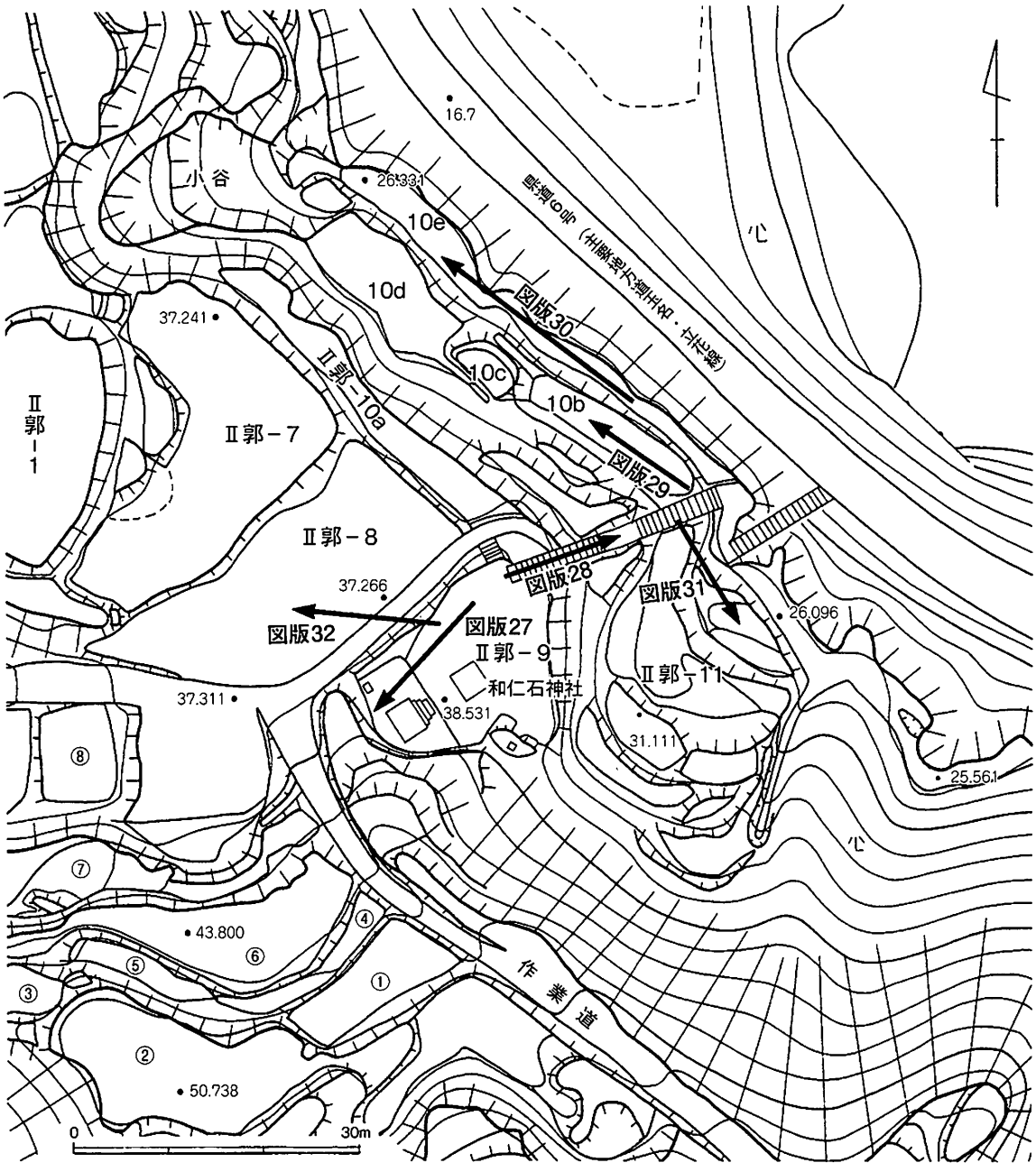
12頁参照

絞り5.6　速度1／15秒

図版26　Ⅱ郭－4d北端部（上段のⅡ郭－4cから見下ろす）

12頁参照

※Ⅱ郭域の東斜面の状態を撮影したもの。上位箇所は幅広の削平地で、県道６号に面する下位箇所は、典型的な帯状地形が見られる。



第19図　写真撮影位置図(6)

絞り5.6　速度1／15秒

図版27　和仁石神社　拝殿と神殿（Ⅱ郭－９）　15頁参照

絞り5.6　速度1／6秒

図版28　和仁石神社　参道（東下の県道６号から上る石段）　15頁参照

絞り3.5　速度1／15秒

図版29　Ⅱ郭－10b（南東→北西）　15頁参照

絞り3.5　速度1／15秒

図版30　Ⅱ郭－10e（南東→北西）　15頁参照

絞り3.5　速度1／8秒

図版31　Ⅱ郭－11（神社参道の石段から見下ろす）　15頁参照

絞り3.5　速度1／15秒

図版32　Ⅱ郭－8　窪地（和仁石神社から見下ろす）　15頁参照

報 告 書 抄 録

書　　名	和仁石山城跡
シリーズ名	和水町文化財調査報告　第３集
編著者名	大田幸博　　益永浩仁
編集機関	和水町教育委員会
所 在 地	熊本県玉名郡和水町江田 3886
発行年月日	2007年３月31日

所収遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査原因
和仁石山城跡	熊本県玉名郡和水町 大字内田字和仁石	2005年10月～2006年11月	学術調査

遺 跡 名	主　な　遺　構
和仁石山城跡	Ⅰ郭山頂域：自然地形（物見の場） Ⅰ郭西側下：帯状削平地 Ⅰ郭北西側下：帯状地形 Ⅰ郭北西直下：幅広の帯状地形 Ⅱ郭－１：楕円形の平地　南斜面に細帯状削平地 Ⅱ郭－２：台形状の平地　法面の削り落とし Ⅱ郭－３：鋭角三角形状の平地 Ⅱ郭－４：帯状地形 西斜面に３段の弧状の帯状削平地 東斜面に６段の帯状削平地 Ⅱ郭－８：堀切状の窪地 Ⅱ郭－10：３段からなる本格的な帯状削平地

和水町文化財調査報告　第３集

和仁石山城跡

平成19年３月31日

〔編集発行〕
和水町教育委員会
〒865-0192　熊本県玉名郡和水町江田3886
☎0968-86-3131

〔印　刷〕
西本印刷
〒861-2241　熊本県上益城郡益城町宮園564-2
☎096-286-4151